

自閉症といわれる方々の「生活」を視野に入れたアプローチ — 片倉信夫の教育論が示すこと (1) —

青山 新吾*

An Approach to Autistic Children that Takes their Daily Lives into Consideration
— The Indication of Theory of Education Advocated by Nobuo Katakura (1) —

Shingo AOYAMA

Although children with autism are often viewed by the characteristics of their disorder, it is more important to be aware that they also live their own daily lives. In recent years, a variety of approaches that focus on the importance of supporting the daily life of autistic children have been proposed. However, these efforts got their start in the past. Nobuo Katakura is a practitioner, and since the 1980s he has pursued work towards the stability and enrichment of the lives of autistic children and their families through activities, including living together with young autistic people, helping with their rehabilitation and education, and having regular consultations. In this study, we tried to examine and organize Mr. Katakura's remarks regarding his practice. The results showed that the core ideas in Mr. Katakura's practice can be summarized into the following four points: "how to warmly observe autistic people", "human relations", "exchanging feelings", and "education techniques". Based on his approach of not looking at autistic children as special, his practice along with a combination of teaching skills and developing personal relationships have helped him to support their lives

Key words : autism, daily lives, support

1 問題と目的

自閉症といわれる子どもたちは、その障害特性によって語られることが多いと思われるが、もちろん日常の生活を営む存在である。青山 (2016) は、自閉症児者及びその生活記述を概観すると共に、その「生活」を研究するための方法論についての考察も

行った。日常のリアルな「生活」を描き出すことが、彼らの生き方の豊かさにつながると考えるからである。

田中 (2014/2014) は、発達障害のある子どもたちを医学モデルで捉えるのではなく「生活障害」として捉えることを提唱している。そこでは、それらの子どもたちを、発達障害児である前にひとりの子ども

キーワード：自閉症, 生活, 支援

※ 本学人間生活学部児童学科

として見ることの重要性が指摘されている。村瀬（2016）も、発達障害を抱える人の生活全体を視野に入れ、当面の課題や目的に沿って生活に即応してどこからどのような方法で関わるのが生きやすさを増すのかについて考えながら進めると述べている。辻井（2016）は、発達障害者の支援に際して、実際の生活の場や就労の場で具体的にどうしたらいいかをわかりやすく教えていくことの必要性を主張している。また山崎（2015）は、日常を生きる自閉症のある子どもと「育てる者」の姿を描くことを主張し、生活へのアプローチが単なる生活スキル向上ではないことを示唆している。これらのように、近年、自閉症児者を含む発達障害児者の支援について、その生活に着目し、それを視野に入れた様々なアプローチを構築することの重要性が主張されている。

しかし、これらの取組は今に始まったことではない。片倉（1985）は、自身の自閉症者への支援について、自閉症児達が親と一緒に暮らしている状態で、本人と家族及び我々第三者が、毎日張り合いをもって生活するにはどうすればいいかということを考え続けていると述べ、生活に支障を来すほど状態がよくない自閉症の青年達との共同生活の記録を発表しているからである。その後も、いわゆる強度行動障害といえるような状態の自閉症の青年達との生活記録を発表し続けた（片倉，1994/2001）。片倉信夫は、施設職員や障害児者及びその家族への支援のために設立した有限会社の代表取締役として実践を続けた専門家である。その理論的基盤は多様であり、仕事のスタンスも共同生活による療育から定期、不定期の相談と多様であった。しかし、その前提には、自閉症児者及びその家族の生活の安定、充実が常にあったと考えられる。

そこで本研究は、片倉信夫の実践及びそ

の思想や哲学から、自閉症児者の「生活」を視野に入れたアプローチにかかわる知見を見だし、今後の生活支援のアプローチに寄与することを目的とする。

2 片倉信夫のヒストリー

片倉は、昭和23年、神奈川県逗子市に生まれている。その後、東京大学教育学部において、故三木安正、故佐治守夫の指導を受け、更に野村東助氏の影響で、自閉症児のプレイセラピーに取り組むようになったとのことである。その後、中野良顕氏の指導により行動療法を学び、療育対象の知的能力の下限を下げている。それ以後、いくつかの無認可、認可施設、教育相談センターでの勤務を経て、自身が設立した有限会社かくたつグループでの勤務を最後に療育実践の一線から退いている（片倉，2016）。その間、プレイセラピー、行動療法だけではなく、動作法をアレンジした実践にも取り組んでいる（片倉，1989/1994）。また、表出援助法、すなわちファシリテイトドコミュニケーション(FC)と似た取組であるペンペン字など、自身のオリジナルであろうユニークな取組も行った（片倉，1994）。いわゆる強度行動障害と言える青年達の状態改善と安定のための実践（片倉，2001）など、常に新しい取組を模索し続けた実践家であったと言える。そのプロフィールを表1に示す。

また、片倉が著した6冊の単著の記述から、年代別に報告された使用技法と媒介となった教材、題材等を表2に示す。

ここに示したとおり、片倉は、特定技法のみを用いた実践者ではない。それどころか、多様な技法を使うと同時に、それらを自分流のオリジナルな手法として展開していたと思われるのである。

また、同時に三重県のあさけ学園、兵庫県のあかりの家等の成人施設のスーパーバ

表1 片倉信夫の略歴

1948年	神奈川県生まれ
1972年	東京大学教育学部教育心理学科卒業
(24歳)	社会福祉法人雲柱社『香川学園』勤務
1976年	東京学芸大学障害児教育専攻科障害児臨床講座修了
1980年	社会福祉法人侑愛会「おしまコロニー」勤務
1981年	『自閉症とは—どうしてよいかわからない子どもの教育法』教育出版 出版
1985年	社会福祉法人けやきの郷『はつかりの家』施設長 『自閉を砕く 脳機能の統合訓練と人格教育をめざして』学研 出版
1987年	社団法人精神発達障害指導教育協会『子ども療育相談センター』所長 (39歳)
1989年	『僕と自閉症』学苑社 出版 (41歳)
1993年	かくたつ商店店主
1994年	『僕が自閉語を話すわけ』学苑社 出版 (46歳) 有限会社・かくたつグループ取締役社長
2001年	『自閉症なんか怖くない 低機能広汎性発達障害者とのつきあい』学苑社 (53歳) 出版
2009年	『僕の大好きな自閉症』学苑社 出版 (61歳)

表2 片倉信夫の使用した実践技法及びその教材等

1981	1989
遊戯療法	まぐろ
自己刺激的な行動以外の行動	運動
レパトリー増加	対話
・抱っこ	仕事
・食事	躯幹ひねり
・歩く、山歩き	1994
行動療法	第1段階の教育
1985	第2段階の教育
同一姿勢保持	力を抜く、緩める
論争	指談、ペンペン字
	徹底受容
	2001
	強度行動障害からの回復

イザーとして、長年に渡って指導助言を行う立場でもあった。つまり、実践者としての立場だけではなく、指導的立場としての業務にも携わっていた。

3 片倉信夫実践の特徴

(1) 分析方法

片倉は、自らの実践について多くの言語化を試みている。その言語化には、実践の具体的な様子だけではなく、その基盤となっている考え方、すなわち思想や哲学とも呼べるものが示されているように考えられた。そこで本研究の目的に迫るためには、片倉の行ってきた言語化の集積とその整理が必要であった。

片倉は、6冊の著書に加え、膨大な雑誌原稿や自身のホームページでの記事を发表している。ここでは、その中で、学苑社の木村咲子氏がまとめた「語録集」と、社会福祉法人あかりの家の三原憲二園長の労作である「あかりの家キーワード集」に収められた片倉のスーパーバイズにおける発言の記述を抽出して分析に使用した。木村氏は編集者として片倉の文献を詳細に読み解いている人物であり、この「語録集」は本研究の分析対象とするにふさわしいものであると考えられる。また、あかりの家は、2000年度から、片倉がスーパーバイザーとして継続して指導していた障害者支援施設・自閉症成人施設であり、片倉の実践哲学や思想が色濃く表れた発言が多数なされたと考えられる場所である。ここで扱われた発言は、事例研究会の席上で、片倉が施設職員の報告に対

してスーパーバイザーとして行ったもののうち、三原氏が、特に重要だと考え整理したものである。表3に、本研究において集積し、分析に使用した文献を示す。これらの中から、内容的に重複しないものを筆者が更に選択した結果、88の記述が抽出できた。

この88の記述について、以下の手順によって整理を試みた。

- ①それぞれの記述をナンバリング
- ②内容的に類似していると考えられる記述をグルーピング
- ③それぞれのグループについてネーミング
- ④②によって類型化された15のグループを更に、内容的に類似していると考えられるものでグルーピング
- ⑤それぞれのグループについてネーミング

88の記述は、内容的に全く整理されておらず、様々な視点からの記述、発言の集積であると考えられた。そこで、KJ法を参考にしたグルーピング（川喜田，1967）を重ねることで、内容面での類型化を試みたのである。

(2) 結果と考察

88の記述をグルーピングした結果、15のグループに類型できた。15のグループとネーミング及びそれぞれに分類された記述内容の一部を表4に示す。

更に、表4に示した15のグループを、内容的に類似しているもの同士で更にグルーピングした結果、8個のグループに累計できた。8個のグループとネーミングを図1に示す。

表3 本研究に使用した文献一覧

語録集 『僕の大好きな自閉症』学苑社 p.263-271
第22回 あかりの家事例研究会 あかりの家 自閉症療育キーワード集 ver.14

表4 88の記述のグルーピングとその構成内容

既存の理論と内面
<p>63「先輩職員が一番新任職員にさせてはいけないことは、形式的に止めると言うことだけが伝わること。止める行動ばかりになると、その人の気持ちに対して集中力が行かなくなる。そうすると、若い職員が段々偉そうになる。なめられちゃいけないばかりになる。新人の時はなめられてもよい。きちんとつきあえるようになって信頼を得ると絶対になめられなくなる。」</p> <p>67「失敗した場合、失敗した時間や失敗した人で、次の回にも確実に乱れる。信頼感等ではなく、条件反射的に出てくる。同じような場面、時間について時に2度目は絶対にクリアしてやるよといった気持ちで接する必要がある。それをクリアすると確かに信頼感につながり、頼れる存在になれるだろう。」</p> <p>70「声を出すためには腹筋に力を入れる。腹筋に力を入れると前傾姿勢になる。だから、声が出るのと前傾姿勢は因果関係ではなく同時だろう。この場合のポイントは正しい(動きづくり)を教えること。力を入れることと力を抜くことをセットで教えるのが原則。どこかに力が入っても、全身に力が入らないようにということ。車椅子をこぐときには相当に力が入る。しかしその時、腹筋に力を入れて前傾姿勢を取ったらだめ、それが正しい車椅子の動かし方だよと教える。」</p> <p>71もう1つ、確かに焦っている部分はあるんだろうけれど、そこに着目せず、その状況になるとそういう動きになってしまう、本当は止めたいと思ってるかもしれない。そうだとすると、別の動きを作ってあげれば、違う方の気持ちが出てくるかもしれない。」</p>
連続性
<p>65「状態が良くなったら、抱えている問題や本人のテーマが変わるので、応援の内容も変えなければならない。そうしないと、「応援」であったつきあいが、例えば服を破かれない、水につけられない、といった「監視」に変質してしまう。」</p> <p>76「彼らには、目が悪い人に眼鏡が必要なように、眼鏡に代わる眼鏡人間が必要だろうと思う。経験上、月に1時間会えばなんとかなる人は多い。何年かに一度で済む人もいる。そういった“定期整備点検”で済む人もいる。」</p> <p>82「状態が良くなったら、抱えている問題や本人のテーマが変わるので、応援の内容も変えなければならない。そうしないと「応援」であった付き合いが、例えば服を破られない、水につけられない、といった「監視」に変質してしまう。」</p>
従うこと・教えること
<p>1「社会性を育てるには、大人に従うことが必要。自閉の子にも、苦痛でなく大人に従う、という面を育てる必要がある。」</p> <p>2「いやがろうがどうしようが、教えなければいけないことは教えるのだと、それが先に生まれて来た人間の、あとから生まれてきた人間に対する責任なのだ、それはふつうの子でも障害の子でも変わらない。」</p> <p>7「障害を持つ子をどういう大人に育てるのか、どういうふうにな世の中に役立てていくのか、これは価値観の問題。はっきりした価値観を持たずに、我が子の指導はできない。自分の価値に従って、勇気をもって自分の子どもを育てていく、それが親の責任。」</p> <p>8「実際の教育活動は、その子どもの知的レベルで、了解可能、実行可能と予測できる範囲内で、その子どもに教えることができるものを、次々と教え続けていく作業。」</p> <p>16「倫理、つまり人としての生きる道。これをしっかり教え続けることが、世の光に育っていかなくてはならない僕の相手たちには必要である。」</p> <p>34「親もプロも絶対にしてはならないこととして、対決姿勢に入ったとき、途中放棄することである。うちまかされてしまうことは、プロにも親にも許されることではない」</p> <p>80「人は規範を守って生きるしか生き甲斐を感じて生きることは出来ないということです。ここでの問題は、種々の観察や付き合いを通して、サリバンがヘレンの最初の教育目標をこれに絞ったことです。つまり一番大事なことは、サリバンの観察眼ではないでしょうか。全ての始まりは、細かな「観察」であり、観察した行動や反応の「解釈」でしょう。彼女がヘレンのどういう行動や反応に着目し、その結果、ヘレンをどういう能力や「性格を持った子と見抜き、ヘレンが何をどう考える子と仮定するか、その眼力に全てはかかってははずです。勝負は「ガンリキ」</p>
親子関係
<p>10「僕は、自閉症幼児にある日突然一人で勝手に自立してほしくない。お母さんとふたりで、苦勞して自立して欲しい。」</p> <p>13「子どもはパニックで親を支配する技術を身につける。親は奴隷の如くに仕える。こうして自閉の孤立が完成する。そして、この孤立は常に親をも子どもも悲惨にする。はりあいをもって生きていく気力を根こそぎにする。必要なことは、親が子どもの苦しみを苦しみ、子どもの喜びを喜ぶこと。」</p> <p>56「僕らはケースと格闘している時、そこが「主戦場」と勘違いしてしまうことが多い。でも勝負は見えていない「主戦場」で決する。自分の持ち場が「主戦場」と感じていると、本当の「主戦場」に思いが至らない。居住施設であっても、多くの場合、主戦場は「家庭」の「母子」関係で、そこで彼らの人生の方向が決まっていく。」</p> <p>73「どんな方法をとる場合でも、我々プロは、親と意見が同じところから利用者との付き合いを始めなければならない。いくらかの方法だと思っても、親が反対だと絶対上手くない。薬でも、親がダメだと思ったら、どんな薬を飲ませてもしないことしからない。お母さんの状態が悪くなると、運動して彼らの状態も悪くなる訳だから。避けなければならないことは、帰省後の状態の崩れを親のせいにしてしまうことだ。我々が崩れを親のせいにし、親があかりの生活を不憫に思い、我々と親とがバラバラだと間に挟まった自閉症の人の状態は必ず悪くなり、その状態を三者が諦めて努力し</p>

なくなってしまうからだ。」

- 75「日本の社会は母系社会で父性原理が弱い。だから、家庭内暴力が出やすい。思春期に母子関係が上手くいかなかったときに、お父さんが登場してきて、世の中の原理原則のようなものをボンと抱えて入ってくれたりすると、母子関係が父子関係に変わって、家庭生活が上手くいったりする。」

一緒という人間関係

- 4「思春期になって、憑かれたように反社会的、非社会的行動を繰り返す子どもたちが、人を呼び、助けを求めているように思える。周囲の人とのつきあいが淡く、色濃い対人関係の経験が乏しく、一人で生きてきているように見受けられる。」
- 5「子育ては、テストの問題とは違う。正しいやり方が、一つあって、一つしかない、という種類の課題ではない。親は自分を見失わないこと。常に自分らしくあること。自分の常識を信じること。教条主義にならぬこと。あとは一緒に暮らせばいい。」
- 15「頻繁に痙攣やパニックを起こす自閉症の人は、周囲の人に気持ちを分かってもらえず、自分の身体を状況に合わせて操縦する術（自己コントロール）を身につける練習をしてもらえず、一人孤立して悩んでいる人である。」
- 52「基本的に、僕らの仕事は対人関係より対人関係を優先しなければならない。「あるものと彼との間に自分の存在を挟む」と言ったりする。やりとりの中でモノを使う。直接モノと本人のやりとりになるとこだわりになる。もう一つは、モノとのかわりに言語的なやり取りもある。」
- 59「そういう対人関係で落ち着いてもらっては困るというのが僕の今の考え方で、対人関係より対人関係の方を優先させて欲しいのです。対人関係の中で安定させることを優先させて欲しいのです。」
- 60「一番の精神科の薬は人間関係である。人間は、人間関係で不安定になるし安定もできる。薬で安定させるより、人間関係で安定させる方が、タフな形で安定しているように思う。」
- 69「一人にしておくとか力む。力む力は、自動的に湧いてくる。この時、対応関係にある動きをさせると、力泉が枯れる。
三つのポーズに意味があるんじゃないかと、人間関係の中に取り込めたから力みが取れたと考えた方がレポートリーが広がる。
一体に、指示やルールに従って動くとか力みは取れる。自主的な動きは力みを招きやすい。
「動かす」んじゃないかと「動いてしまう」、「力を入れる」んじゃないかと「力んでしまう」。
「寝転ぼう」で、寝転んだところで、イイ感じの流れに入った。「ゆっくりしとこうな」で、コクリと背いたところで、勝負あり。後は触ってやれば力が抜けていく。
声は腹筋が原則。呼吸は胸と腹だが、力むと息を吐けなくなる。息を吐くためにしゃべる人もいるくらい。応援できているところがイイ。」

ライフステージごとの教育内容

- 12「目標は3つ。第一の目標は忍耐力・自制心を養うこと。第二の目標は集中力を養うこと。第三の目標が、人との関係、やりとりを楽しむということ。」
- 17「思春期は社会性が飛躍的に成長する季節である。だから、家庭の中だけでなく、世間（たとえば学校）でも活動し、居場所があり、評価されることがどうしても必要な季節でもある。」
- 20「どの人にも向上心があって、特に10歳くらいまでは豊富にある。その時に学ぶ姿勢、つまり人からいろんなことを教わると自分が垢がっているようなことが出来て面白い、というのを身につけられたかつつけられないかで随分その子が変わってくる。」
- 38「幼児期にしっかり躰けることは、思春期に起こる問題の、心の準備や技術的な準備を母達にさせることだ。」
- 72「どういう状況でも、きちんと三食（主食）を食べること。丸飲みしたり、掻き込んだりせずに、シッカリかんで食べる。何処で生活しても、一定時間熟睡すること。声や身体の動きを止め、余分な力を抜いて、決められた時間に眠る。途中で目が覚めても、集中して再び眠る。うんこは毎日定時に1回。必要以上に力まないこと。しっこの場合、特に力まない必要がある。どういいうイレでも出せるには練習が必要である。」

自分

- 3「管理体制をはずしても本人がどれだけ自分で自分を規制して生きていけるかが、本当の教育」
- 6「自閉症児が一般の若者と唯一違うところは、自問自答ができないところ。従って、自問の部分は周囲の人が、言葉や態度で補ってやらねばならない。」
- 9「教えることができるものを不断に教え続けていくことが、教育における具体的活動だし、必要条件。が、教育で重要なことは、教えることが可能なものを教え続けていく過程を駆使して、教えることができないものを悟らせていく、気づかせていくこと。」
- 18「一人一人の人間がいれば、人間の数だけある意味で壊れ方があって、それだけの回復の仕方や訓練の利き具合、やり方があって、最終的には本人の努力にかかってくると思う。本人がどれだけ自覚して治そうとするか、クリアしようとするか、その本人の努力をどれだけ僕らが引っ張り出せるか。考え方としては脳溢血の発作のあとのリハビリとたいして変わらない。」
- 32「一つ一つの場面で何%の努力をしているかにかかわらず、常にその状況で最大努力を本人から引き出し、終始自分がやっていると実感させ続けたい限り、介入は成功しない。」

支援の基本

- 23「普通に生活できるように本人の動きと環境を整えてあげる。そういうことをやるのが自閉症教育の一つの土台。」
- 37「標語的に僕は事前の説明、事後の反省会の励行といっているが、プロは偶然・たまたまという線を超えて、先手で彼等に説明し

ていく力を持つ必要があり、その事の重大性は強調してもしすぎることはない。」

77「伸び伸びとか自由より、構造化され組織化された分かりやすさの重要性は、自閉症理解と支援の基本中の基本である。従って、その専門店としてのTEACCHの理解と手法は徹底的に勉強して、身に染みつく程に自分のものにしておくことが大切だ。ただ、基本だから、それに拘束されすぎると原理主義になる。構造化だけに頭と心と動きを占領されると、狭く硬直した理解と支援になってしまう。そして、本当の支援から離れていき、人と人のつながりを見失ってしまう。」

特別に見ない

19「特別な人達だと思わないための努力をいつもいつもしていないと、障害の集積がその人みたいに見てしまうとその人のことが分からなくなってしまう。」

21「自閉症児を特別なものとして見ることを止めたとき、彼らがよく見えてくるということを最後にいっておく。by十亀史郎先生」

22「周囲の人たちが彼らの「見かけ」に対して、普通の気持ちで付き合くと、彼らが特別な人にしか見えてこない。十亀先生の日本語の厳しさは、人というものが普通他人の見かけ、外から観察可能な言動に反応するものだと承知しながら、自閉症の人たちに関する限り、それを我々に禁止している点にあるのだろうと思う・・・」

24「自閉症だと言うことで、繰り返しの質問をするんだとか自閉症だから女の人が気になるのかなという、特別の見方をすると、この人の苦しみが見えてこない。」

見方・捉え方

25「個別的な理解」と「類型的な理解」

26「僕は20代の時、一人ひとりに、つきまとうてつきまとうて「密着取材」していけば、自閉症の人が何を感ず、どういう風に考えているか、お母さんに次ぐ位は見えてくると考えた。」

27「どう見えるかにとらわれず、前後関係からその人がどう考えているか、何を感ずているかということにこちらが集中して、そこに働きかけること、そういう癖を体につけるというのがプロとして大事。」

29「この不思議な人達とのつきあいを楽しめ、仕事が面白くないと駄目。そして、自閉症の人に接したとき、見た目の印象を保留しておいて、何に困っているのだろう？何が気になるのかな？疲れてきたのかな？さては、お腹が減ってきたな！と多方面から考えられる思考力が必要。」

55「僕は長い間「本居宣長」のお世話になった。

宣長さんは、ボイと漢心（からごころ）に汚染されていない古事記の時代に入って行って、実感を込めて断定しまくる。

そういう宣長さんの世界に（小林）秀雄小父さんも、ボイッと入って行って、まるで何もかも分かっているみたいに宣長さんのことを書いています。

これが許されるなら、僕もことばのない子どもの世界にボイと入って行っていいだろう。そこで、全身で感ずたことを、頭をフル回転させて言語化する。」

86「帰納の結果は傾聴に値しますが、その結果から出発（演繹）すると、現実にそぐわなくなるものがほとんどです。学べることは、現実からどうやってその結論を得たのか、結論を得るまでの過程にあると思います。『見て、感ずて、考える』プロセスです。」

特定個人

30「親にしろ、教師にしろ指導員にしろ、自閉症の人達に対して有意味特定個人とならねばならない」

35「こわい職員とは、本人以上に本人のことが見えている・解っている人。本人以上にしっかりと先のことが見えている人のこと。」

61「プロとして担当にたった場合、自分は相手にどのくらい存在しているかをいつも評価していないとほならないと思う。チームのチーフは、チームメイトの存在感も感ず取っておく必要がある。

ハッキリしていることが一つある。彼らにとって、外や内からの刺激の影響をミニマムにし、普通に動ける応援をキチンとしてくれる人以外、この「存在感」を獲るできないということである。」

意味や気持ちのやりとり

33「やることは強引に素早くやらねばならないが、実際にやることを媒体とした意味や気持ちのやりとりが一番大事」

36「支援の鉄則は、彼らの心に依存すること。物理的に離れていても、精神的には繋がっていること。」

45「組織化や構造化は大事である。必要条件である。自由な環境で、本人の自主性を待つという方策は良くない。

が、この仕事、人間相手の仕事は、組織化や構造化だけは不十分である。

中核は人付き合いであり、非合理的なものを考慮にいれなければならない。合理的、科学的な考え方が役に立たない部分があることを覚悟しなければならない。」

57「希望山荘行きます」は「母が、希望山荘に行くと言っているが、本当ですか？」と、私には聞かえる。

その心は「僕は不確定がダメ。行くのか行かないのか、どっちでもいいから、とにかくハッキリしてください。」だろう。

「決めるのは育藤園長です」は、「君の母さんは言ったのは間違いです。希望山荘へは行きません」と伝わったんじゃないかな。ならば落ち着く。

「決まっていないことに耐えることも必要。いいチャンスだから、ピョンピョン跳んだりしないで、我慢することも覚えなさい」くらの台詞は、職員に内蔵されていて欲しい。」

64「彼らの場合、破きたくなくても破いてしまうことがある。それは思い通り動けていないから。そういう場合、形上止めていく。」

形から入る。

ただ、形から入っても、相手が自分のことをどういう人間だと思っているか、そこはしっかり見ていかねばならない。」

79「一つは、彼が鼻を殴ってしまった時、「殴らせてしまって悪かったな。今度からさせないから大丈夫だよ」という日本語を先ずはさみ、「でもね」のあと、「起きて待ちなさい」とやったら、布団をめくった時に襲ってこなかったかななんて思います。

一つはその点について、プロとして力量不足であったと謝っちゃうという手があると思う。で、「でもね」と続ける。」

81「彼女の意見を聞いたのか否か。彼女の考えをアレコレ想像してみたのか否か。『個室となり』という表現は自然現象のようだがそうではない。『個室にした』のだ」

83「感度とあるが、家庭で崩れて緊急利用となったことに、本人がその緊急利用をどう説明を受けたのか、あるいは納得があるのか。いつもの利用と違うわけだから、当然混乱があるはず。その感度が粗い。」

84「多動の人は、何かしなないと切り替われない。だからトイレに連れて行ったらたまたまおしっこが出て、それで切り替わったのかもしれない。だから、いつもの排尿の主張と違う排尿の主張があった可能性が高い。逆算するとこの緊急利用は本人相当納得していないし混乱していた可能性が高い。だから、調子崩していたのではなくて、自分は正しいと家で主張していたのかもしれない。そういった感度も上げて欲しい。」

87「○君が、何を生き甲斐にして生きているか、どういう目標を持って生活しているか、今の生活に納得があるのか、といった彼の精神生活に関する、職員サイドの想像する内容」です。彼は、毎週あかりに来ることをどう思っているのか、そういった彼に対する理解無しに、人づきあいは成立しないし、彼サイドにたった話し合いがないと、問題行動の内容は見えてきません。

これだけ服を破き、水につける生活を繰り返している、何かにつけ、この行動が出てきてしまいます。その一つ一つに何が込められているか、感じ取っていかねばなりません。」

技術

28「常同行動や自傷行為を消すことの基本は、自分の心のとおり自分の体を動かすようにすること。」

40「どんな人間の中にも普通の時間とおかしな時間がある。普通に生活している人は、自分の中のおかしな時間をうまくコントロールして表面化させていないだけである。問題行動、行動障害を起こしてしまう人は、取るに足らない小さな変化でも、それがきっかけとなって、自己コントロールを見失いおかしな時間に支配されてしまう。だから、おかしな時間の芽をこまめに摘み取って、普通の時間を持続させることが、支援の大事なポイント。」

43「何回も言わない!」というのが、言い方とタイミングとか口調とかで、確認をレポートさせる原因になっているかもしれない。これ読んでいても、先輩を真似しているだけで、自分の言葉になっていないから、落ち着く雰囲気ではない。職員もビビリしている。職員が多動になれば彼に伝播して、止めなさいと言えば言うほど、多動が加速される。それに比べると「お布団敷いてから教えてあげます」と日本語を使う職員というのはビビリしなくて済む。単純化すると、彼の多動のスイッチが入るか入らないかということ。そういうトーンで付き合っあげることが、そのレポートボタンを外していく作業になっている。」

46「手をつないだり、体に触れられたりするのが苦手ということは、つなぎ方や触れ方を相当考えないとダメだ。

触る人が緊張しているということもある。

接触が強すぎたり、強いのと弱いのがパッパ変わるのもダメ。だからピンチの時は彼女に手を添える接触は絶対必要。離れたらパンパン来るから。

嫌な時は絶対強すぎる。揉むはダメ、ギューもダメ。いかに触ったところから緩めていくか手を載せているだけで、更に10段階緩めていくくらいに。」

47「この場合、何が大切かという、側に寄っていくスピードだろう。おずおずと寄っていくのか、普通より早く寄っていくのか、寄り方で反応が違う。

十亀史郎さんは、1m以内で言うか、1m以上のリーチで言うかで、聞き取りの反応が全然違うと言っていた。同じように、居室の中で言うか部屋の外で言うかも違う。見えないバリアだ。」

48「○さんのようにグチャグチャになっている人には、離れていったらガーンとくる。体に触って言う必要がある。触ることで言葉が伝わるような触り方をしていく。指先で触るのか、手のひらで触るのか、背中に触るのか、体の場所でも接触面積でも違う。タイミングもある。」

49「これは多動勝ち。セットだと破らなくて、セットを崩すと破るというのは、職員が多動負けしているということ。「自傷したらダメ」「服やぶっちゃダメ」など、耳元で呪文のように繰り返す方法は案外効く。」

50「また、自分で「ダメ」といったから止まったと考えるより、先手とれてると考えた方が良い。生活棟が変わったのを機に、今まで後手に回っていたのを、先手に持ち込めたと考えてみる。今まで「破っちゃダメ」という日本語がこの辺でとまってたのが、関所を越えた日本語になったと試してみてもいいかも。」

51「ただ、上手くいったからといって真似しても、無謀な流れになることもある。やってみないと分からない。また、多動勝ちすることとは、同じことを繰り返すのではなくて、上手くいかないときにすぐに止めるとか、すぐに別のやり方に変えるとか、変更がきかないとダメ。」

53「多動の人はジツとしているとリラックスしない。動いているとリラックスできる。多動のスイッチが入って動くダメで、スイッチが入らない動きを作ると全てが上手くいく。」

58「基本的に認知障害というのは、分からないとかやりたくないから出来ないのではなくて、分かっているしやろうと思うのだけれどもできない、それが認知障害。

思考ができないのではなくて、手段・方法が機能しない誤。学問的に言うと、失行状態、失語状態。動こうと思っても動けない。

動作法でいう動作不自由。自己と主体のコミュニケーションが上手くいかない。

片倉語に直すと、この場合は開始困難。だから口に入れてやることだったり、少量にすることを。終結困難というもある。この一皿という風に設定されないと終われない。

もし精神的な問題であるのなら、食べれば食べるほど拒否が多くなるはず。経験的に自閉の世界でほとんどそういうことはない。食べ終わると嬉しそうな顔をするのがすごく多い。」

66「全身に力みが入って「多動モード」になると声が出る。この場合、声は結果。しかし、今度はその声が「多動モード」維持の働きをすると、声は原因になる。こういう循環があるかもしれないという仮説に立てば、声を「燃料」にたとえることができる。」

68「彼らの動きは2種類のモードで考えると解りやすい。①自分の動きが自分の身体に所属している時と②自分の動きが自分の所有外になっている時である。後者は反射的で、「先行刺激に支配されている」と言えるし、本人の人格とは無関係に動いてしまう脱コントロールの状態とも言える。このモードの切り換えを上手くしてあげる必要がある。そのためには、最初からかなり突っ込んだ付き合いをしなければならない。」

85「パニックにたいする原則

①パニックを恐れない。来るなら来いの気構えがいる。怯えは押し殺す。

②パニックを起こした姿勢を変える。立っていたら寝かすとか。

③場所を移動する。パニックを起こした部屋とか場所を変える。

④その人が反応してしまう語りかけをして、反応させる。「リンゴは何色」?」などの質問でも、腕あげでもよい。要はこちらの働きかけに反応すればパニックは止まる。」

つきあいの変化

42「A→B→A」

Aは介入せず静かな状態。問題は起こしていないが、バラバラ。Bは、介入するので騒ぐ状態。A'は、介入後の静かな状態。バラバラではなく一緒。本来の人間関係。

AとA'は決定的に違うものと捉えられる感度が必要。Bを恐れすぎないこと。あるいは、恐れていることを自覚すること。そして、Bの向こうにあるA'に辿り着ける力量を持つこと。」

54「異常なつきあいによって状態がいい。だからずっと異常なつきあいを続けるのは間違い。

なんで異常なつきあいをするのかということ、自然なつきあいに移行するため。自然なつきあいのための出発として、使っているだけ。目標はお互い楽に付き合うということ、変にならないと言うこと。そこだけは誤解してはいけない。

今から、どういう風にならぬようにつなげていくかを、みんなで考えてやらないと、いつまでもいつまでも異常なつきあいをしてなきやなんない。」

職員へのメッセージ

14「狂者に必要なのは、何をいっても理解者なのではないのか。一人苦しんでいる障害者に、とりあえず必要なものは、暖かい援助の手ではなくクールな理解者なのではないか。」

41「フラッシュバックと捉えたと昔の傷ついた話になって、それなら温かく見守ってあげましようとなる。昔のことだから今の私(支援員)の問題ではないということになって、手を打つ必要がなくなる。しかし、この事例では、フラッシュバックと言いながら現在に問題があると思いはじめた。何故か? 性格なのか人生観なのか自閉症観なのか、もう少しはっきりさせた方がいい。そして、現在に原因があると思えない人と、思える人がいるということもポイント。その差はなんだろうか。」

44それと「私では無理」と判断したところが勝負。形だけ真似して、うまくいくかどうか不安感だらけで展望のない人と付き合いより、その人のペースで自分なりのやり方でしっかりつきあってくれる人の方が落ち着く可能性がある。その方がつきあいになっている。」

74「親は我々以上に苦労している。それを超える苦労をし、結果を出さない限り、親たちはプロを信用しない。小さいときからプロは役に立たず、混乱させられるようなことばかり言われ、親の努力の結果が今であるわけです。逆にそれを突破して親に信頼してもらえば、連携することが可能はずだ。

もちろん、難しい。尋常な苦労では、今のままだ。これまでの人のしなかった程の苦労をして、突破せねばならないのだから。」

78「研修の最終目標は「自己研修できること」

彼らが何かをやったとき、何かを教えてくれている。知らせてくれている。それを職員が掴んで、力量がワンランクアップした時に、必ず彼らも伸びていく。

僕の講演を聴いてもほとんど意味がなくて、彼らから学んだ時に、本当の積み重ねのある学び方ができる。そういう積み重ねとか、自己学習できる職員になりたいものです。」

88「例えば、裸でいたときに、無理矢理着せると悪化する可能性があるからという理由で、放置する場合がありますが、これで同じ人類と職員が感じているとは思えないのです。

彼にも洋服を着せねばなりません。彼も着たいはずですが、でも気に入る着せられ方と、我慢ならぬ着せられ方があって、彼が受け入れられる着せ方ができていない。彼が裸でいるのは、彼がそれを好んでいるからでも、着せられることが嫌だからでもないと考えなければなりません。我々が無能だと考える必用があるということです。」

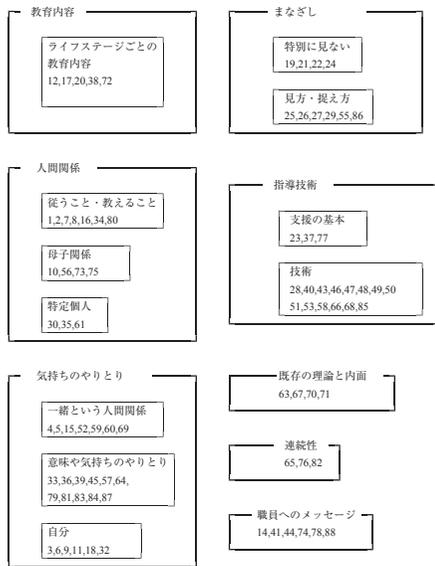


図1 15のグループの再グルーピング

表2に示したように、片倉は、特定の実践技法や理論のみを使用していた実践家ではない。遊戯療法、行動療法、抱っこ法、動作法、ファシリテイトドコミュニケーション等多様な理論や技法を使用すると共に、それらを自身のセンスでアレンジしたり組み合わせたりしていたのである。「片倉法」とでも呼ぶべき特定技法を主張していた訳でもない。あくまで、目の前のケースの実態に応じて、使えるものは使うというスタンスであったと考えられる。

しかし、使えるものは使うといっても、闇雲に実践を構想している訳ではない。

本研究で扱った88の記述をグルーピングした結果、表4に示した15のグループに類型された。その15のグループを更にグルーピングした結果、表5に示した8つのグループに類型された。「教育内容」「まなざし」「人間関係」「指導技術」「気持ちのやりとり」「既存の理論と内面」「変化」「職員へのメッセージ」の8グループである。

その中でも、グループを構成している記述の数から考えると、特に「まなざし」「人

間関係」「気持ちのやりとり」「指導技術」の4つのグループが、片倉の実践の中核を成していると考えられる。「まなざし」とは、我々が自閉症の方々を見る際の見方、その視点である。

本研究では、片倉の取組の中核を成している4つのグループについて検討を試みながら、自閉症といわれる方々への「生活」を視野に入れたアプローチに関わる知見を見いだしたい。

①自閉症といわれる方々へのまなざし

前節で示したグループのうち「まなざし」を構成しているのは「特別に見ない」と「見方・捉え方」の2つであった。

片倉はその語録の中で「特別な人達だと思わないための努力をいつもいつもしていないと、障害の集積がその人みたいに見てしまうとその人のことが分からなくなってしまふ」と述べ、障害特性のみで人を捉えないことの重要性を述べている。更に「周囲の人たちが彼らの「見かけ」に対して、普通の気持ちで付き合ふと、彼らが特別な人にしか見えてこない。十亀先生の日本語の厳しさは、人というものが普通他人の見かけ、外から観察可能な言動に反応するものだ」と承知しながら、自閉症の人たちに関する限り、それを我々に禁止している点にあるのだろうと思う…」と述べている。「見かけ」に対して反応するのが一般的であることを分かった上で、それを禁じた故十亀のこトバを引用している。これらは、かなり厳しい要求である。かなりの努力をしないと「見かけ」に反応してしてしまうのが常だからである。しかし、自閉症の人達の思い、苦しみ、喜びなどを理解するためには、敢えて、自閉症であるという見方を封印し、特別なものとして見ないという努力を我々に課すと主張しているのである。

また、片倉は「僕は20代の時、一人ひとりに、つきまとしてつきまとして「密着

取材」していけば、自閉症の人が何を感じ、どういう風に考えているか、お母さんに次ぐ位は見えてくると考えた」と述べ、個別の徹底観察の重要性を指摘している。また「どう見えるかにとらわれず、前後関係からその人がどう考えているか、何を感じているかということにこちらが集中して、そこに働きかけること、そういう癖を体につけるとするのがプロとして大事」と述べ、先述したように「見かけ」に反応しすぎて、自閉症の方々の内面等に気持ちを巡らせられないことを危惧しているのである。

ここでの主張は、現在の特別支援教育における主流の考え方、すなわち、障害特性の把握とその特性への対応とは異なったアプローチが示されており、非常に新鮮かつ重要な指摘である。人としてつきあっていくために必要な見方・捉え方として、「見かけ」にとらわれないことが述べられているからである。そして、そのために「特別なものとして」見ないとするのである。

②人間関係

第1節で示したグループのうち「人間関係」を構成しているのは「従うこと・教えること」「親子関係」「特定個人」の3つであった。

人間関係形成という主張は多くの論者によってなされるが、片倉はそれを3つの要素で明確に示していると思われる。

まず「従うこと・教えること」について、片倉はその記述の中で「社会性を育てるには、大人に従うことが必要。自閉の子にも、苦痛でなく大人に従う、という面を育てる必要がある」と明確に述べている。これは言い換えれば「いやがろうがどうしようが、教えなければいけないことは教えるのだと、それが先に生まれて来た人間の、あとから生まれてきた人間に対する責任なのだ、それはふつうの子でも障害の子でも変わらない」という主張であり、ここでも

障害特性を前面に押し出して「特別」であるとはせず、どの子ども達にも共通に成立させたい関係性として述べられている。これは、筆者が学校教育において、大人が子どもに説明できる「関係」を、第1段階の関係とすると述べている（青山, 2012）考え方も共通するものである。基本的な関係として、「従う」ことを基盤としているのである。

しかし、その人間関係は、単純に言うことを聞かせればよいのだということではない。それは「親子関係」のグループを構成する片倉の以下のことばから窺える。片倉は「僕は、自閉症幼児にある日突然一人で勝手に自立してほしくない。お母さんとふたりで、苦勞して自立して欲しい」と述べている。また「子どもはパニックで親を支配する技術を身につける。親は奴隷の如くに仕える。こうして自閉の孤立が完成する。そして、この孤立は常に親をも子も悲惨にする。はりあいをもって生きていく気力を根こそぎにする。必要なことは、親が子どもの苦しみを苦しみ、子どもの喜びを喜ぶこと」とも述べている。ここに主張されているのは、子どもを孤立させないこと、親子が一緒に苦しみ、喜びながら生きることである。親が子どもに言うことを聞かせることは、あくまで基盤であり、そこから構築する関係は、従う、従わせる関係ではない。この関係については、次節で詳しく論じることにする。

また「特定個人」というグループも、片倉の人間関係成立に関する考え方を色濃く表していると考えられる。このグループに関連する語録の中で片倉は「親にしろ、教師にしろ指導員にしろ、自閉症の人達に対して有意味特定個人とならねばならない」と述べ、また「プロとして担当にたった場合、自分は相手にどのくらい存在しているかをいつも評価してはならないと

思う。チームのチーフは、チームメイトの存在感も感じ取っておく必要がある。ハッキリしていることが一つある。彼らにとって、外や内からの刺激の影響をミニマムにし、普通に動ける応援をキチンとしてくれる人以外、この「存在感」を獲得できないということである」と述べているのである。

これも重要な点である。つまり、片倉は、人間関係を「有意義特定個人」となるような色濃いものでなくてはならないとしているのである。これは、自閉症の臨床における支援技法が、特定の関係によるものではなく一般化され、誰にでもできるものであるとする考えとは、一見相反しているように見える。しかし、よく考えてみれば、人間関係は人と人の間に紡がれるものであり、そもそも誰もが同じようにできるとする考えとは異なるはずである。自閉症の人たちの生活を視野に入れたアプローチにおいて、「人間関係」という要素が必要なのだと思う。同時に、誰もが使えるとする思想は、技術、技法にかかわるものだとも考えられるため、第4節で言及する。

③気持ちのやりとり

片倉実践の中核をなしていると思われるものとして、次に「気持ちのやりとり」のグループを取り上げる。このグループを構成しているのは「一緒という人間関係」「意味や気持ちのやりとり」「自分」の3つであった。

先ずは「一緒という人間関係」である。片倉はその語録の中で「思春期になって、憑かれたように反社会的、非社会的行動を繰り返す子どもたちが、人を呼び、助けを求めているように思える。周囲の人とのつきあいが淡く、色濃い対人関係の経験が乏しく、一人で生きてきているように見受けられる」「頻繁に癇癇やパニックを起こす自閉症の人は、周囲の人に気持ちを分かってもらえず、自分の身体を状況に合わせて

操縦する術（自己コントロール）を身につける練習をしてもらえず、一人孤立して悩んでいる人である」と述べている。ここでは、一人で孤立して生きることで、周囲に分かってもらえず悩んでいる自閉症の方々の問題が指摘されている。つまり、前節で指摘した「親子関係」にもあったように、決して一人で生きるのではないこと、周囲の大人、家族も孤立しないことが強く主張されているのである。筆者は「第1段階」の関係を基盤として、子ども達があらゆることに、自主的、主体的、創造的に取り組み、学べる関係を「第2段階」の関係であると主張している。そして、「第1段階」の関係からできるだけ速やかに「第2段階」の関係に移行することが重要であると述べている（青山, 2012）。この考え方は、関係成立が、誰かと「一緒」に歩めることにつながるものであると考え、決して孤立しないことを重視している意味で、片倉の主張と重なっている。と同時に、ここでいう「一緒」とは、物理的な「一緒」ではないと考えられるのである。それは、次に検討する「意味や気持ちのやりとり」のグループを構成する語録のことばかり読み取れる。

片倉は「支援の鉄則は、彼らの心に依存すること。物理的に離れていても、精神的には繋がっていること」と精神的なつながりを主張している。また「組織化や構造化は大事である。必要条件である。自由な環境で、本人の自主性を待つという方策は良くない。が、この仕事、人間相手の仕事は、組織化や構造化だけは不十分である。中核は人付き合いであり、非合理的なものを考慮にいれなければならない」とも述べている。ここに書かれていることは、非常に示唆的である。というのも、組織化、構造化といった自閉症の方々にとって分かりやすい環境づくりや必要な統制状況作りは必要条件であるが、それに加えた人づきあい、

つまりは、人間関係づくりが重要だと述べられているからである。

精神的なつながりのある人づきあいとはどのようなものなのだろうか。片倉は「彼らの場合、破きたくなくても破いてしまうことがある。それは思い通り動いていないから。そういう場合、形上止めていく。形から入る。ただ、形から入っても、相手が自分のことをどういう人間だと思っているか、そこはしっかり見ていかねばならない」と述べている。これは、つきあう相手にどのように見られているか、自分自身が相手の内面にどのように映じているかというメタ的な視点を持つことである。また『「〇君が、何を生き甲斐にして生きているか、どういう目標を持って生活しているか、今の生活に納得があるのか、といった彼の精神生活に関する、職員サイドの想像する内容』です。彼は、毎週あかりに来ることをどう思っているのか、そういった彼に対する理解無しに、人づきあいは成立しないし、彼サイドにたった話し合いがないと、問題行動の内容は見えてきません。これだけ服を破き、水につける生活を繰り返していると、何かにつけ、この行動が出てきてしまいます。その一つ一つに何が込められているか、感じ取っていかねばなりません」という指摘もなされている。ここでは、自閉症のある方の精神世界に関する想像、その方サイドに立った話し合いの必要性が主張されている。

つまり、自閉症の方々の精神世界、内面に対する想像が重要なのである。それこそが人間関係づくりなのであり、その関係が「一緒」に歩む、「一緒」に進むことにつながるのである。

しかしながら、片倉の主張はここで終わらない。ここで検討している「気持ちのやりとり」を構成するグループに「自分」がある。

「自分」のグループの中に以下のようなことばがある。「管理体制をはずしても本人がどれだけ自分で自分を規制して生きていけるかが、本当の教育」ということばである。これは、人間関係づくりを進め、気持ちのやりとりをしながら、最後に目指すところは、本人の自己規制だとするものである。更に「教えることができるものを不断に教え続けていくことが、教育における具体的活動だし、必要条件。が、教育で重要なことは、教えることが可能なものを教え続けていく過程を駆使して、教えることができないものを悟らせていく、気づかせていくこと」だと述べられている。気持ちのやりとりの先には、本人自身の気付きや悟りを見るというのである。では、何に気付けさせるというのだろうか。片倉は「一人一人の人間がいれば、人間の数だけある意味で壊れ方があって、それだけの回復の仕方や訓練の利き具合、やり方があって、最終的には本人の努力にかかっていると思う。本人がどれだけ自覚して治そうとするか、クリアしようとするか、その本人の努力をどれだけ僕らが引っ張り出せるか。考え方としては脳溢血の発作のあとのリハビリとたいして変わらない」や「一つ一つの場面で何%の努力をしているかにかかわらず、常にその状況で最大努力を本人から引き出し、終始自分がやっていると実感させ続けない限り、介入は成功しない」と述べている。気付けさせることは、本人自身の努力の必要性であり、自分自身がやっているという実感なのである。

自閉症の方々への教育、療育等で、周囲の人たちの理解の重要性が主張されることがある。もっともである。周囲の無理解が劣悪な生活環境を生み、その影響を受ける中で、自身のコンディションを乱す場合も当然存在するからである。しかし、本人が自覚、理解、努力する必要はないのか。こ

の問いに対し、片倉の答は明確である。人間関係の中で、気持ちのやりとりを行いながら、本人に気付いてもらえるようつきあっていくのである。その気付きを元に本人の努力が始まったとしても、決して孤立させず、応援し続けることが必要である。それが「一緒」の世界なのだと考えられる。そして「一緒」の世界では、本人を取り巻く周囲も「一緒」になって悩んだり喜んだり考えたり努力したりする。このようなことを実は「理解」するというのかもしれない。

④指導技術

ここまで、「まなざし」として自閉症の方々への見方「人間関係」「気持ちのやりとり」として、関係のつくり方とその意味について考察を行ってきた。しかし、本章の冒頭で述べたように、本研究でのグルーピングによる片倉の取組の中核をなす要素として「指導技術」というグループも抽出された。ここでは、「指導技術」のグループを構成する「支援の基本」と「技術」について述べたい。

片倉は「支援の基本」について「普通に生活できるように本人の動きと環境を整えてあげる。そういうことをやるのが自閉症教育の一つの土台」と述べている。発達を促すというよりも、日々の生活を安定させるための視点として、動きと環境を整えることを指摘しているのである。また、「伸び伸びとか自由より、構造化され組織化された分かりやすさの重要性は、自閉症理解と支援の基本中の基本である。従って、その専門店としてのTEACCHの理解と手法は徹底的に勉強して、身に染みつく程に自分のものにしておくことが大切だ。ただ、基本だから、それに拘束されすぎると原理主義になる。構造化だけに頭と心と動きを占領されると、狭く硬直した理解と支援になってしまう。そして、本当の支援から離れていき、人と人のつながりを見失ってし

まう」とも指摘している。構造化、組織化という自閉症の方々との関わりの基本を指摘した上で、そこに留まらず、こだわらずという主張をしている。これは、基本にこだわることでの関わる側の思考停止を戒めるものである。そして、ここまで再三指摘してきた通り、人との関係づくりの重要性を改めて強調しているのだと考えられる。

また、「技術」については、本研究で取り扱った88の語録の中では、触れ方、スピード、距離、変更、動作、行動分析、行動のモードといったものが言及された。例えば「手をつないだり、体に触れられたりするのが苦手ということは、つなぎ方や触れ方を相当考えないとダメだ。触る人が緊張しているということもある。接触が強すぎたり、強いのと弱いのがパツパ変わるのもダメ。だからピンチの時は彼女に手を添える接触は絶対必要。離れたらバンバン来るから。

嫌な時は絶対強すぎる。揉むはダメ、ギューもダメ。いかに触ったところから緩めていくか手を載せているだけで、更に10段階緩めていくくらいに」と、触れ方の技術について言及されている。また「この場合、何が大切かという、側に寄っていくスピードだろう。おずおずと寄っていくのか、普通より早く寄っていくのか、寄り方で反応が違う。十亀史郎さんは、1m以内で言うか、1m以上のリーチで言うかで、聞き取りの反応が全然違うと言っていた。同じように、居室の中で言うか部屋の外で言うかも違う。見えないバリアだ」のように、寄っていくスピードや距離についても、細かな指導技術について述べられている。

更に、「多動の人はジッとしているとリラックスしない。動いているとリラックスできる。多動のスイッチが入って動くダメで、スイッチが入らない動きを作ると全てが上手くいく」であったり「彼らの動きは2種類のモードで考えると解りや

すい。①自分の動きが自分の身体に所属している時と②自分の動きが自分の所有外になっている時である。後者は反射的で、「先行刺激に支配されている」と言えるし、本人の人格とは無関係に動いてしまう脱コントロールの状態とも言える。このモードの切り換えを上手くしてあげる必要がある。そのためには、最初からかなり突っ込んだ付き合いをしなければならない」という指摘にあるように、動作、行動、モード変更についての技術的な面についても指摘がなされている。

つまり、片倉の実践において、指導技術は重要な意味を有している。見方、捉え方と関係づくりを基盤としながら、実際の人づきあいにおいては、細やかな指導技術を意識し、駆使していることが推察できるのである。また、表2に示したように、その指導技術は単一、唯一のものではない。様々な指導技術をオリジナリティあふれる組み合わせ方で活用しているのである。そして、年度を追うごとに、常に技術革新がなされていることも伺える。

なお本研究では、分析に取り扱った記述の中にある指導技術のみをグルーピングしたに過ぎず、実際にはもっと複雑かつ豊かな指導技術の組み合わせがなされていると思われる。片倉の指導技術に関する更なる言及は今後の課題としたい。

⑤片倉実践の中核を成すもの

ここまで概観してきたように、片倉の実践の中核をなしている4つのグループの知見を整理したものが図2である。

ここで示されているように、生活にアプローチする片倉の取組は、自閉症を特別なものとして見ないことから見える普通の感覚を大切にしつつも、徹底観察による生活の理解、障害特性理解を基盤としているものである。そこに、特定有意味個人の関係づくりを行い、精神世界、内面のつながり

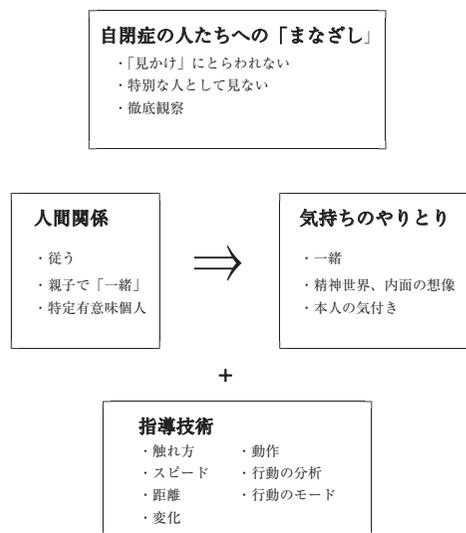


図2 片倉実践の中核を成す考え方

による「一緒」の世界をつくっていくのである。その成立プロセスにおいては、多様な指導技術の組み合わせと絶えざる技術革新がセットになっていた。これを実現するためには、深い自閉症の理解が不可欠であると思われる。技術は、よい意味で「特別」の見方をすることによって開発、革新されていると考えられるからである。そして、関わる側が絶えざる技術革新を行っていること自体が、実はお互いに当事者としての「一緒」の世界を築きあげている状態なのだとと言えるだろう。

以上、本研究では、片倉の先駆的実践の中から自閉症児者の「生活」を視野に入れたアプローチとして「まなざし」「人間関係」「気持ちのやりとり」「指導技術」の4つの視点を見だし、それぞれについて検討を試みた。そこで得た知見は先述の通りであるが、これらは一見すると、当たり前のような内容とも見える。しかし、4つの視点の知見内容それぞれには、それほどの斬新さがないとしても、これらを必要に応じて適宜組み合わせ、個別性の高い実践を行う

ことが「生活」を視野に入れたアプローチとして重要になるのだと考えられる。とすれば、片倉の取組について検討することは、これからの生活支援のアプローチを考える上で重要な示唆を与える可能性がある。今後は、片倉の取組について、個別性に応じた視点の組み合わせについての検討を行っていきたい。

引用文献

- 青山新吾 (2012) 個別の指導における子どもとの関係づくり, 明治図書
- 青山新吾 (2016) 厳しく自閉症児を育てたと話す家族の子育てにおける「家族の流儀」の検討—「連絡帳」の活用—ノートルダム清心女子大学紀要人間生活学・児童学・食品栄養学編, 40(1), 1-12.
- 片倉信夫 (1981) 自閉症とは—どうしてよいかわからない子どもの教育法, 教育出版
- 片倉信夫 (1985) 自閉を砕く 脳機能の統合訓練と人格教育をめざして, 学研
- 片倉信夫 (1989) 僕と自閉症, 学苑社
- 片倉信夫 (1994) 僕が自閉語を話すわけ, 学苑社
- 片倉信夫 (2001) 自閉症なんか怖くない低機能広汎性発達障害者とのつきあい, 学苑社
- 片倉信夫・片倉厚子 (2009) 僕の大好きな自閉症, 学苑社
- 片倉信夫 (2016) プロフィール, 辰源の独り言 <http://www2.bbweb-arena.com/kakutatu/index.html> (2016.9.25)
- 川喜田二郎 (1967) 発想法 創造性開発のために, 中公新書
- 村瀬嘉代子 (2016) 発達障害と生活臨床, 必携発達障害支援ハンドブック, 110-116. 社会福祉法人あかりの家 (2016) 第22回あかりの家事例研究会
- 田中康雄 (2014) 発達障害児である前に、ひとりの子どもである, 発達障害の再考, 10-25, 風鳴社
- 田中康雄 (2014) 総論 生活障害としての発達障害, 発達, 137, 2-9.
- 辻井正次 (2016) 生活することを支える研究と支援, 必携発達障害支援ハンドブック, 157-161.
- 山崎徳子 (2015) 自閉症のある子の関係発達, ミネルヴァ書房